doi：10.20776/S13482084-68-P241
千葉大学教育学部研究紀要　第68巻　241～246頁（2020）

小学校の道徳科における肢体不自由児・者に関連する教材の一考察
―教科書を中心とした指導法の改善及び教育課程編成に向けて―

田中　亮[1)*]・奥住　秀之[2)]・平田　正吾[3)]
[1)] 長野県塩尻市立塩尻東小学校　[2)] 東京学芸大学 教育学部　[3)] 千葉大学 教育学部

About the physical disabilities in the methods of education of the "morality"
- For the improvement of the instruction method mainly on the textbook and curriculum formation -.

TANAKA Ryo [1)] , OKUZUMI Hideyuki [2)] , HIRATA Shogo [3)]
[1)] Shiojiri East Elementary School, Nagano　[2)] Faculty of Education, Tokyo Gakugei University
[3)] Faculty of Education, Chiba University

本研究では，「特別の教科　道徳」としての肢体不自由児・者に関連した教材の教科書への掲載状況と教師へのインタビューを行った。教科書への掲載については，多くの発行されている検定教科書があり，なおかつ高学年を中心に多学年に渡っていることが明らかになった。また，教師は指導上の成果を感じることが多く，肢体不自由児・者に関連した教材が道徳的価値に児童が触れる上で重要な役割を担っていることが示唆された。一方で，さらなる指導法や教育課程編成の改善に向けて，実践の蓄積や教材研究の質と量の確保も課題として挙げられた。

キーワード：特別の教科 道徳（The special subject: morality），
肢体不自由児・者（persons with physical disabilities），
教科書（textbook），教育課程（instruction method, curriculum）

1．はじめに

学校教育法施行規則一部改正と学習指導要領改訂により，教科外の学習として行われてきた「道徳の時間」は，2018年度から「特別の教科　道徳」として教科化された。「特別の教科　道徳」においては，学校教育全体を通して「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと」を目標にして行われる道徳教育の要であるとされ，より一層の指導法・教育課程編成の改善や教材の充実などが求められている（文部科学省，2018）。

従来，道徳の授業では，副読本，視聴覚教材，自作資料などが教材として用いられてきたが，教科化後には，指導と評価は検定教科書を中心に行われるようになった。現在，文部科学省（2018）の教科書目録によると，小学校「特別の教科　道徳」の検定教科書は８社より発行されている。各社とも，道徳教育の目標を達成するために指導すべき内容項目（文部科学省，2018）を網羅しつつ，様々な資料で構成されている。具体的には，児童が学校・家庭・地域等で直面しそうな場面を描いた物語，偉業を成し遂げた人物の資料，伝統文化などに関する資料などを中心とした読み物に加え，時事問題，環境問題，国際問題，ソーシャルスキルトレーニング等の内容も取り上げられている。児童の発達段階に合わせて意欲的かつ効果的に道徳的価値に触れて学ぶための様々な工夫がなされている。

連絡先著者：田中　亮　m181209s@st.u-gakugei.ac.jp

ところで，インクルーシブ社会・共生社会を迎えた現在，注目したいのは「特別の教科　道徳」の教科書において「障害」について扱われている教材があるという点である。富樫・水野・石上・西舘・徳田（2004）は，教科化以前の小学校，中学校で使用されていた道徳副読本における障害に関する事項の掲載状況を調査したところ，小学校，中学校ともに掲載されていることを確認している。また，水野・富樫・石上・西舘・徳田（2004）は小学校・中学校で使用されていた道徳副読本に，障害に関する内容がどのように掲載されているかという視点での分析を行ったところ，小学校の道徳科では，原因や特性等のいわゆる障害の特徴について書かれている資料が多いことを明らかにしている。それらの資料を用いた学習をすることの有効性について取り上げた研究もある。加藤・武田（2018）は，小学校６年間の障害を扱う道徳学習を体系化して実践したところ，多くの児童が発達段階に合わせて，障害理解を深めるとともに，道徳的な価値も高めることができたと報告している。

また，水野・徳田（2012）は，道徳副読本で扱われている障害種に注目したところ，学年が上がるにつれて障害を扱う教材は増えていくが，その半数以上は肢体不自由児・者に関する教材であったことを指摘している。多様な障害種がある中でも，とりわけ，肢体不自由児・者に関連した教材が多くあるということは，特筆すべき点と言えよう。肢体不自由児・者に関連した教材に関しては，水野（2008），今村・有川（2017）が，道徳教材「車いすの少年」の有効性について検討している。困難に直

面している肢体不自由者に出会ったときについて取り上げている本教材では，援助か見守りかの択一ではなく，多様な観点の中で，活発に児童・生徒が議論することが道徳的価値を高めていくために必要であり，そこに肢体不自由児・者について取り上げる意義があると指摘されている。

しかし，道徳学習の中で肢体不自由児・者に関する教材を扱うことの報告や検討は，その多くが教科化以前のものであり，教科化後における検定教科書の肢体不自由児・者に関する教材やその指導法の研究はまだ少なく，十分に調査や検討がなされているとは言い難い。

そこで，本研究では，研究１として，現在８社より発行されている小学校「特別の教科　道徳」の教科書において肢体不自由児・者に関連した教材の掲載状況を網羅的に調査する。研究２として，現職の小学校の学級担任をしている教師から肢体不自由児・者に関連した教材に関する実践上の成果と課題について，インタビューによる聞き取り調査を行う。これらをまとめ，その傾向を報告することで，今後の「特別の教科 道徳」における教育課程編成上の肢体不自由児・者に関連した教材の有効性や指導法改善に関する視座を検討する。

２．研究１　小学校・道徳科教科書における肢体不自由児・者に関連した教材の掲載状況

２．１.方法

２．１．１　調査対象と調査期間

現在発行されている小学校１学年から６学年までの「特別の教科　道徳」の教科書と，それに付随する指導書を調査対象として用いる。なお，2018年11月現在，文部科学省（2018）の教科書目録によると，小学校「特別の教科　道徳」の検定教科書は，光文書院，廣済堂あかつき，学校図書，日本文教出版，教育出版，学研みらい，光村図書出版，東京書籍の８社から発行されている。

調査期間は2018年６月上旬から７月下旬までであった。

２．１．２　調査方法

読み物資料本文，年間指導計画，学習指導案等を俯瞰し，肢体不自由児・者に関して扱われている教材名，主なねらいとする内容項目を本稿第一筆者が記録し，表にまとめた。

２．２．結果

小学校の「特別の教科　道徳」の検定教科書において掲載されている肢体不自由児・者に関連した教材の一覧を表１に示した。公平性・平等性を担保するために，発行社は特定されないように記した（表１）。

表１　小学校「特別の教科　道徳」の教科書において肢体不自由児・者に関連した教材

	１年	２年	３年	４年	５年	６年
A社				パラリンピックのきょうぎ（A希望と勇気,努力と強い意志）		
B社				文字を書く喜び・星野富弘（A希望と勇気,努力と強い意志）		車いすの少女（B親切・思いやり）夢に向かって（A希望と勇気，努力と強い意志）
C社						
D社	オリンピック・パラリンピック（A希望と勇気,努力と強い意志）					
E社			わたしたちの「わ」（B親切思いやり）		花に思いをこめて－星野富弘－（A希望と勇気,努力と強い意志）	人生を変えるのは自分－秦由加子－（A希望と勇気,努力と強い意志）
F社			パラリンピックにねがいをこめて（C公正,公平,正義）			
G社				より遠くへ（A希望と勇気,努力と強い意志）	車椅子の最強テニスプレイヤー国枝慎吾（A希望と勇気,努力と強い意志）	
H社					ノンステップバスでのできごと（B親切・思いやり）	義足の聖火ランナー（Dよりよく生きる喜び）

発行社別の掲載状況を見ると，７社から発行されている検定教科書において，肢体不自由児・者に関連した教材が取り上げられていた。内容項目の「親切・思いやり」をねらいとする教材については，車いすを使用して生活する人に出会ったときにどのように相手の気持ちを考えて行動できるかという話の内容があった。

また，内容項目の「勇気」をねらいとする教材については，車いすや義足を使用しているスポーツ選手や画家の勇気や努力に焦点を当てた話の内容があった。スポーツに関しては，パラリンピックに関して取り上げられた内容もあった。

学年別の掲載状況で見ると，１学年において１社１話，３学年において２社２話，４学年において３社３話，５学年において３社３話，６学年において３社４話で掲載されていた。

なお，１社については，１学年から６学年までの中で，肢体不自由児に関する内容の掲載はなかった。

２.３．考察

８社中７社から発行されている検定教科書において取り上げられている点や複数の学年において掲載されているから，肢体不自由児・者に関連する内容は多くの検定教科書に教材として掲載されており，なおかつ主に高学年を中心としながら，多くの学年に渡っていると言える。これは，教科化以前の副読本において肢体不自由児・者が比較的に多く掲載される傾向があるという水野・徳田（2012）による報告と重なる。教科化後も肢体不自由児・者は，教科書に登場する障害児・者として比較的多く取り上げられていることが示唆された。

多くの肢体不自由児・者に関連する教材が採用されている要因を考えると，車いすや義肢装具の使用などで生じる困難や支援方法が児童・教師にとって理解しやすいことやパラスポーツの普及と社会的な注目が集まっていること，肢体不自由児・者の社会進出が進んできていることなどが推察される。なお，肢体不自由児・者のスポーツに関して取り上げることで，内容項目「勇気」の理解につながるという点については，パラリンピック教育の成果を指摘する先行研究も認められる（小林・平賀，2018）。

一方，発行会社によっては，肢体不自由児・者に関する教材を全く取り上げていない教科書も存在することや学年による掲載状況の違いがあることが明らかになった。これは，富樫・水野・石上・西舘・徳田（2004）の教科化前の障害全般に対する出版社によって掲載状況に大きく差があるという指摘と一致しており，教科化後の肢体不自由児・者に関しても同様のことが言える。肢体不自由児・者を取り上げていない教科書が採択された自治体で学ぶ児童にとっては，肢体不自由児・者に関して学習の中で知る・理解する機会がほぼないままである可能性も推察された。

また，「親切・思いやり」や「勇気」を道徳的価値の内容項目としてねらいとする教材が多くあることがわかった。具体的な学習内容は，「街頭や公共交通機関で車いすを使用する者に会ったときにやさしく支援する方法」「パラアスリートの努力の積み重ねを自己に重ねる」などが主な学習内容である。これらは，車いすや義足等，肢体不自由児・者の困難さを解消するために，周囲の人の親切・思いやりや本人の努力が非常に重要であるという流れである。

一方，「肢体不自由児・者に出会う→手伝う→思いやり・やさしさ」ということではなく，相手の困難さやニーズを深く考えることが本当のやさしさや思いやりであることにつながるという多面的な見方を取り上げている教材もあった。「車いすの少女」という教材では，物語の主人公が道端で困っていた車いすの少女に言葉を掛けようとすると，その少女の母親から制止される。始めはなぜかわからなかったが，少女が苦労して車いすを操作する努力の姿や，困難を自力で解消したときの少女の笑顔を見て，本当に優しさの意味を考えるという内容である。この教材では，一面的に「困っている人を助けることが思いやり」と捉えるだけでなく，時には見守り，その人の本当のニーズを考えて行動することも思いやりの形のひとつであるということを取り上げている。障害児・者に関連した内容を扱うことで多面的・多角的な考え方ができるのは，肢体不自由ならでは言え，道徳的価値の深化につながり得るであろう。これは，水野（2008），今村・有川（2017）が，肢体不自由児・者について教材として扱う際の「援助」か「見守り」かの議論が重要であるとする検討と重なりうる一方，この資料の教材化は自主的な支援の抑止につながるのではないかとする批判的な見解もあり（宮澤，2018），慎重に考えていく必要がある。

また，今回の掲載状況の調査は，肢体不自由児・者に関連する教材に限定したものであったが，今後は，他障害種に関する教材の掲載状況についても，調査・検討する必要があるであろう。

３．研究２　肢体不自由児・者を教材化した道徳学習の成果と課題

３.１.方法

３.１.１.調査対象と調査期間

現在小学校において学級担任をしている教員５名を対象とした。各教員の所属する学校の学校長に研究の趣旨を伝え，協力を依頼し，調査参加者本人の承諾を得た上で，インタビューを行った。調査に参加した教職員の平均教職歴は，22.8年であった。なお，調査期間は，2019年10月上旬から下旬であった。

３.１.２．調査項目

⑴「特別の教科　道徳において肢体不自由児・者に関連した教材を取り上げた成果はありますか」⑵「特別の教科　道徳において肢体不自由児・者に関連した教材を取り上げる上での課題はありますか」２項目について，半構造化面接によるインタビューを行った。インタビュアーは筆頭筆者であり，参加者の口頭による回答の記録も行った。インタビュー時間は調査者一人に対して30分程度だった。

３.１.３　分析

分析については，質的記述的研究法を用いた。インタ

ビューを録音し，面接内容の逐語録を作成し，意味のかたまりごとに要約した。

３．２.結果

「特別の教科　道徳」において肢体不自由児・者に関連した教材を取り上げた際の実践上の成果については，表２に示した。

クラスの仲間が骨折した際や病気が原因で車いすを利用した際にもやさしく接することができた場面から，内容項目の達成が感じられたという成果が多く挙げられた。他には，思いやりを日常生活の中で具現化の達成，パラリンピックとの関連，特別支援学校との交流との関連などの成果として挙げられた。

一方，「特別の教科　道徳」において肢体不自由児・者に関連した教材を取り上げた際の実践上での課題については，表３に示した。

課題として，教科化前に副読本で多く取り上げていた肢体不自由児・者に関連した教材が，教科書教材として採用されず，肢体不自由児・者について取り上げにくくなったという回答があった。また，児童がお手伝いして

表２ 肢体不自由児・者に関連した教材を取り上げた際の実践上の成果

肢体不自由児・者について考えることは思いやりを日常生活の中で具現化することにつながりやすい。（５名）
肢体不自由児・者の困難はイメージしやすく，勇気の内容項目を扱いやすい。（４名）
テレビでよく見ることのあるスポーツ選手について教材に取り上げられていることで児童がイメージしやすい。（４名）
パラリンピック東京大会への関心を高めることができた。（３名）
特別支援学校との交流につなげることができた。（３名）
星野富弘さんの教材を道徳で扱った後に，図書館で本を読み聞かせて理解を深めることができた。（２名）
教室に星野富弘さんのカレンダーを貼ることで，道徳の授業をより身近に感じることができていた。（１名）
地域の障害者施設のことを理解することにつながった。（１名）
肢体不自由児・者に関する知識が教師側に足りないと感じている。（１名）
道徳以外ではなかなか扱えないので障害について触れるいい経験ができた。（１名）
総合的な学習の時間の福祉的な内容の学びと関連づけることができた。（１名）
授業後，保護者から家で車いすマークに気付くようになったという声が寄せられた。（１名）

表３　肢体不自由児・者に関連した教材を取り上げた際の実践上の課題

年間３５時間の時数確保が難しい。（５名）
限られた時数の中で，肢体不自由児・者に関連した教材を落ち着いて扱う余裕がない。（４名）
児童が手伝ってあげることが親切という考えから，さらに相手を考えられるように発展して欲しいが，そこまで深めることが難しい。（４名）
教科化前に副読本で多く取り上げていた肢体不自由児・者に関連した教材が，教科書教材として採用されず，肢体不自由児・者について取り上げにくくなった。（３名）
児童のこれまでの生活経験や家族関係での肢体不自由児・者とのかかわりまで把握できていない。（３名）
知的障害のない肢体不自由児・者は多く取り上げられているが，重症心身障害児・者についても扱いたいと思うがどうしたらいいかわからない。（３名）
肢体不自由児の家族を取り上げて，家族愛などに内容項目をねらう学習にしたいと感じているができていない。（２名）
実際に支援者として働く方を取り上げてキャリア教育と関連付けたいと思うが，できていない。（１名）
肢体不自由児・者に関する知識が教師側に足りないと感じている。（１名）
視聴覚教材で適切なものがあれば使いたいが，なかなかない。（１名）
パラアスリートをゲストティーチャーとして招聘したいが，実現できていない。（１名）
肢体不自由児・者に関することで，間違ったことを教えていないか心配になるときがある。（１名）

あげることが親切という考えから，さらに相手を考えられるように発展して欲しいが，そこまで深めることが難しいという回答，思いやりや親切という価値観を教師側がいかに捉えるかが難しいという指摘，知的障害のない肢体不自由児者は多く取り上げられているがそれ以外の子についても扱いたいと思うがどうしたらいいかわからないといった指摘を課題として挙げた教員が複数名いた。さらには，実際に支援者として働く方を取り上げてキャリア教育や家族を取り上げて家族愛などに発展できると感じているが，肢体不自由児・者に関する教材は親切・思いやりにつなげる流れの話が多く，それができていないという点なども課題として挙げられた。

３．３　考察

成果として「困っている人にやさしくする」という思いやりの気持ちを児童が日常生活において具現化し，行動できるようになったことは多く挙げられた。肢体不自由児・者に関連した教材を学習することは，ねらいとする「親切・思いやり」や「勇気」といった内容項目の道徳性の育成につながりやすいことが示唆される。この要因としては，児童にとって車いすや義足等は肢体不自由児・者の困難や支援方法のイメージをすることが比較的容易であることが推察される。この点は通常の学級における特別支援教育にかかわる授業改善の推進がなされる中（田中・奥住，2019），わかりやすい授業づくりや日常生活への般化などの指導法改善につながる可能性もある。また，これは学習指導要領で重視されている指導と評価の一体化にもつながり得るであろう（文部科学省中央教育審議会，2015）。

また，児童がよくメディアでよく見ることのあるスポーツ選手について教材に取り上げられていることや授業後に取り上げた画家の絵をカレンダーとして教室に掲示することなどにより，児童が道徳の授業を身近に感じることができるという成果が挙げられた。この点については，肢体不自由児・者の関連する教科書教材を教師が，上手に利用することで成果につながったと考えられる。

次に課題としては，肢体不自由児・者に関連した教材を取り上げるにあたり，児童の生活経験や家族関係の中で肢体不自由児・者とかかわる経験がこれまでどれくらいあったかまでは確認できずに授業を行っていることが挙げられた。これについては，授業前に児童の実態を含めた教材研究の必要性が示唆された。

さらに，年間35時間という道徳科の授業時数を確保し，内容項目を全て指導の中で網羅する必要がある中で，時間をかけて内容を深めていく時間的な余裕がなくなっていることについては，特に考えるべき教科化後の新たな課題であるだろう。

なお，教科書の本文中に登場する肢体不自由の障害者は，そのほとんどが知的発達の遅れのない者であり，重症心身障害者に関して取り上げた教材はなく，扱うことができていないという点を挙げる教師もいた。この点については，研究１の結果とつながり，実際に教科書教材を概観しても，扱う教材はないことが明らかになっている。教師は，重症心身障害者に関して道徳学習の中で取り上げたくても，検定教科書に出てきていないという現状から，その実現は難しくなっていることが挙げられた。教師側から，肢体不自由という障害を通して，多様な道徳的な価値につなげていきたいが，それができない現状が課題として示唆された。この点についても，実際に肢体不自由児・者を扱う教科書教材を概観しても，その多くが「親切・思いやり」や「勇気」の内容項目をねらいとして取り上げている現状と関連していた。「親切・思いやり」や「勇気」は，肢体不自由児・者に関連してつながりやすい内容項目であることが推察される一方で，限定的な道徳的な価値であるとも言えよう。親切や思いやりの価値の扱い方について，肢体不自由児・者に関連する教材の中でどのように扱うかを教材研究する必要がある。

肢体不自由児・者の生活や生い立ち等を取り上げることで「家族愛」や「生命尊重」の内容項目と関連した教材化も考えられる。肢体不自由児・者の支援をする人に焦点を当て，「勤労・感謝」を価値とすることもできる。このような視点に立ち，価値の拡張を行うことも可能であるだろう。

４.まとめ

本研究では，「特別の教科　道徳」としての肢体不自由児・者に関連した教材の教科書への掲載状況と教師へのインタビューを行った。これらを総合的に考察すると，教科書に多く掲載されている点や教師が成果と感じることが多い点から，肢体不自由児・者に関連した教材は道徳的価値に児童が触れる上で重要な役割を担っていることが示唆された。教科化を迎えた今，さらなる実践の蓄積や教材研究の質と量の確保が必要となっていると言えよう。

インクルーシブ社会・共生社会を迎えた今，障害児・者について，どのような内容を取り上げて，どのような価値をねらって教材化するかを系統的に考えていく段階にある。「特別の教科　道徳」の教育課程編成と障害との関連をさらに明らかにしていくためには，他障害にも広げて検討・比較していく必要があるであろう。その上で，道徳科の中での教材の多様化や，さらには，交流および共同学習，人権教育，キャリア教育などの他教科・領域にも発展できることが推察される（加藤・藤井，2017;黒川・是枝，2006;）。これは，障害に関連する学習を中心としたカリキュラムマネジメントとしても取り組むことにつながり得る可能性がある。

謝辞

本研究において，インタビューにご協力いただいた校長先生，並びに教職員の皆様に記して感謝の意を表します。

文献

細谷一博・大庭重治（2010）居住地校交流における相互理解の促進と情報の共有化に関する事例的研究．障害者問題研究 38（2），146-155.

今井まどか・有川 宏幸（2007）道徳教材「車いすの少年」に対する大学生の意識について．新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編 10（1），47-53.

加藤充子・武田鉄郎（2018）小学校6年間の系統立てた障害理解教育の一提案 －2つの道徳授業の実践を通して－．和歌山大学教職大学院紀要 2，159-167.

加藤しお子・藤井慶博（2017）居住地校交流の現状と課題に関する研究 －特別支援学校及び小・中学校の教員の意識調査と事例分析を通して－．秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要　39，167-176.

黒川亜希子・是枝かな子（2006）障害理解教育の実際と課題.発達障害研究 28（2），167-179，2006-05-31

小林尚平・平賀慧（2018）日本におけるパラリンピック教育の動向とその教育的効果－IPC公認教材「I'mPOSSIBLE」を事例に－．日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会紀要 10，85-11

水野智美・徳田克己（2012）道徳副読本における障害の扱われ方の変化 － 2003年度版と2010年度版とを比較して－教材学研究 23，273-280.

宮澤弘道（2018）「道徳教科書における障害者像」福祉労働．161．70-78.

文部科学省（2018）小学校学習指導要領解説「特別の教科　道徳」

文部科学省（2018）教科書目録

文部科学省中央教育審議会（2015）初等中等教育分科会（100回）資料

田中亮・奥住秀之（2019）小学校の通常の学級における特別支援教育の推進―学級経営・授業改善・校内連携・校内体制を視点に―．東京学芸大学紀要総合教育科学系　70（1），383-392.

富樫美奈子・水野智美・石上智美・西舘有沙・徳田克己（2004）道徳副読本における障害の扱われ方―道徳副読本における障害に関する内容の分析を中心に―．日本教育心理学会第46回総会発表論文集．221